

上海フォーラム(老舎与都市文化 高峰論壇)前後

高橋 由利子

1. 2011. 3. 11 と夏休み

2011年の夏は特別な夏であった。同年3月11日に発生した東日本大震災に起因する政府の節電要請により、私の所属する上智大学でも、トイレの温水シャワーの停止からパソコンの輝度の調整まで、細かい指示が出された。また、夏場の冷房節電のため、春学期の授業が2週間短縮された。そのため内外で多忙を極めたものの、8月の初旬にはイギリスに行くことができ、ロンドン大学での研究が可能となった。

2. 晴天の霹靂

イギリスに着いて間もない2011年8月5日に、中国老舎研究会の関紀新会長より、以下のようなメールを受け取った：

「今年の10月中旬に中国老舎研究会と上海師範大学の共催で、小規模・高レベルの『老舎と都市文化国際フォーラム』を行うことは、すでに舒乙先生からの連絡で御存じのことと思いますが、我々は貴殿の参加を熱望し、再度フォーラムの要綱をお送りします。」

舒乙先生からは何の連絡も無かったし、始めてこのことを知ったので、私はとても驚いた。さらに驚いたことには添付された上海師範大学都市文化研究センターからの要項(預通知)の年月日が2011年6月8日となっていたことだった。とりあえず日本老舎研究会の倉橋代表委員と会

報担当の渡辺さんにメールで要項を転送したが、倉橋代表委員もそれについて何も知らないようであった。この夏、舒乙先生を日本に招聘する計画が進んでおり、倉橋代表委員も舒乙先生も多忙の極にあるのだらうと理解した。

3. フォーラムの性格

要項(預通知)によると今回のフォーラムは以下のように説明されていた：

「上海師範大学都市文化研究センターは中国教育部の人文社会科学研究の重点機関で、2004年以来、都市文化研究に従事し、上海とその他の都市(香港・台北・ソウル・東京・ニューヨーク・バンクーバ)をテーマに多くの国際会議を主催してきたが、今回は老舎研究の国内外の影響力を持つ研究者を40名招き10月の中旬に「老舎と都市文化」をテーマの国際フォーラムを行う。参加者は全員論文を提出すること。8月末を論文のテーマ、9月末を論文本文の締め切りとし、論文集にまとめてフォーラム当日に参加者に配布する。」

また、以下の10の小テーマが参考として挙げられていた：

1. 老舎と諸都市での遍歴と創作、2. 「京城文化」と老舎の文化批判、3. 老舎の「游子心态」と文学、4. 都市の景観と老舎の文学、5. 老舎と現代作家の都市観の比較、6. 老舎の海外での都市遍歴と創作変化、7. 老舎の小説の中の市民類型、8. 老舎の創作と都市風俗、9. 老舎の作品における言語と都市文化、10. 老舎の存在と中国の都市の発展、である。

4. 参加を決める

最初に「老舎と都市文化」という大テーマを見た時、一体どういう関連があるのだらうと思

っていたが、この小テーマを何回か眺めているうちに、何か書けそうな気がし、とりあえず参加するとの返事を关纪新会長に出したが、何をどう描くかは五里霧中であった。追って期日が10月の14・15日に決まったと連絡があった。

イギリスから帰国直前の9月1日、招聘状がメールで来た。正式な書状は舒乙先生が日本に行った時に手渡すとあったが、まだ何も書いていない上に締め切りが9月20日に早まっていたので、論文発表をあきらめ、参加だけにすることも考えた。

9月10日に舒乙先生から招聘状を受け取ったが、その頃、始めてこのフォーラムのことを知った布施さんに、舒乙先生が論文無しの参加もOKと話すのを聞いて少し安心した。

そうこうするうちに大学の入試関係の仕事や、後期の授業、体調不良の悪条件が重なり論文作成は絶望的な状況になった。ところが、それにも関わらず、私は10月5日にメールで論文を送ることができたのである。今考えても不思議であるが、この文を書くために過去のメール記録を見て、それはひとえにこのフォーラムの主催者杨剑龙教授のおかげであることを痛感した。

5. 今までの学会と違った点

過去に何回か老舍関係の中国での学会に参加したことがあった。しかし論文発表は必ずしも必須ではなく、発表する場合もレジュメを先に送るか、参加当日持参しても何とかなることがあった。また、日程も大雑把なものであったし、発表プログラムもその日に会場入り口に貼りだされるということもあった。

ところが今回のフォーラム(高峰论坛)は、“高峰”というだけあって論文提出が必須であるだけでなく、「学術規定」に従って論文概要・作者紹介・キーワードも必要であり、論文題目・概要・キーワードは中国語以外に英文翻訳も付けるとされた。確かにネットで見る中国の学術雑

誌の論文はすべてこの形式で、これが標準化されてきたことを感じた。

6. 最初にしたこと

それで、まず先に論文のテーマと概要を考えた。考えるうちに、2007年の日本の老舍研究会で、老舍とイギリスのロンドン会資料に関する発表をした時、質問に答えて「老舍はいつも逃げる人だった。」と言ったことを思い出した。それで、今回は、この「逃げる」ということが老舍の初期小説の中で、都市との関係でどのように描かれているかを検証し、では、どのような条件があれば、逃げないですむのかということ、現代の都市との対比で書くことにし、題目を「老舍早期小説中的人物描写与老舍の都市观」と決めた。英語と中国語のチェックを経て、概要等の中国語版と英語版を9月20日に送ることができた。

この概要を書くことで、それを少しずつ反復検討しながら、何が書きたいかを考え、関連資料を調べて肉付けし、論文の形に発展させていくことができたと思う。私の今までの論文は老舍とキリスト教について、内外の資料を細かく調べ、資料によって語らせるという方法をとっていたので、積極的に自分の考えを出すことはしなかった。そのため、今回のように老舍の都市観というひとつの切り口を設定することによって、自分の中でもやもやしていたものから焦点を絞る作業は、苦しくも新鮮な喜びがあった。

7. フォーラム以前の杨剑龙教授からの具体的な連絡

9月27日に杨剑龙教授から今回の参加者の通信録が来た。連絡先の他に、発表論文の題目、滞在日と同室者、上海博覧会会場見学ツアー等に参加の有無の欄があり、記入して返送した。この通信録には私と布施さんの他に何人かの日本の研究者の名前があった。

10月5日に論文を送り、10月8日には宿舎の

手配状況と交通状況のリストが来てフォーラム参加が現実味を帯び、上海に行くことが少し楽しみになってきた。

10月10日にフォーラムの日程、宿舎、交通、天気予報の具体的な情報が来た。日程を見て驚いたことは、私の名前が、3か所に出ていたことである。一日目午前の開幕式のあいさつと大会発表、午後の分科会の司会。同時にその分科会で発表する人の論文が5編、司会をよろしくとのメールとともに添付ファイルで送られてきた。文句を言う暇も無く、とりあえず挨拶の文を用意し、司会はもう一人の中国人の先生にまかせることにした。論文を書くだけで疲労困憊した身にはそんな余力は無かったので。

10月13日に宿舎正面ホールの工事がまだ終わらないので、横の入り口から入るようにとの連絡が来た。前日の10月14日、主人と一緒に出発し無事上海に着き、宿舎に入った。

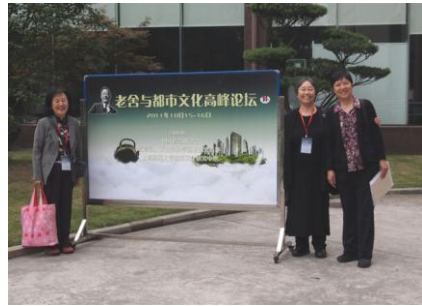
8. フォーラム一日目 (2011年10月15日)

開幕式の挨拶は关纪新、舒乙、陈思和、苏智良の4人のえらい先生方に挟まれ緊張したが、会場の暖かい拍手に支えられ、無事に終えることができた。

午前中の大会発表は、一人15分の発表時間を大幅に超過する人が何人かいて、時間的な余裕がなく、準備したものを全部は読むことができなかった。ただ、送った論文が「フォーラム論文集」に収録され事前に配布されていたので、他の人の論文も含め、全文が閲覧可能であった。概要だけのものもあつたり、また論文集に未収録だが、発表当日に配られた論文もあつた。杨剑龙教授の編集後記に、フォーラム開催の経緯や編集方針、最初国際学会の予定が手続き上国内学会にしたこと等が書かれていた。

午後の分科会は、司会は杨迎平先生に任せ、私は持参したストップウォッチを持ってタイムキーパーに徹した。分科会は大会に比べると、率直にみんなが意見を述べ、それぞれの発表に

ついて辛辣な批判や活発な質疑応答があつたので、とてもおもしろかった。



右起2番目が筆者、左は布施直子会員

9. フォーラム二日目 (2011年10月16日)

午前中は大会発表と閉幕式が行われた。私はすべての任務を終えたので、すっかりリラックスして時には疲労から居眠りなどしながら、気楽に参加していた。ところが閉幕式での挨拶に关纪新が突然私を指名したのには驚いた。日程表では日本の老舎研究会の倉橋幸彦代表委員が舒乙顧問、吴小美名誉会長に続いて所感を述べるはずであった。ところが倉橋氏は一日目の夜に关纪新会長に挨拶にだけ来て会場を後にしたということであった。本当に突然であったので、しどろもどろながら、経験豊かな研究者や若手研究者の発表がそれぞれにおもしろく、楽しめたこと、杨剑龙教授の周到な準備と行き届いた采配、それを支え細やかな仕事をした大学院生達への感謝を述べた。

午後は上海世界博覧会会場と文化人街の見学、夜は黄浦江浦东の海鸥舫での海鮮料理の宴会があり、その後、浦东滨江大道で夜景を見ながら川岸の散歩を楽しんだ。

10. フォーラム終了後の一日

翌日は大学の中の商店を見たり本屋さんに寄ったりした。上海師範大学はそれほど広いキャンパスではないが、中に色々なキオスクがあり、洋服、文房具、野菜・果物、パン、スイーツ、

お菓子・可愛い小物等の店や、スーパーもあってちょっとしたおみやげも買うことができた。また日本料理屋を含む食堂街もあり、大学の外の商店街や売店などともあわせると、生活は便利であり、学生は大学生活を十分楽しんでいるようであった。

その後大学周辺の路地をあちこち歩き回り、夕方から近くの桂林公園に行った。時間が遅いため無料で入れたし、閉店間際の売店で金木犀のゼリーをもらったりした。公園の中には立派な西洋式建物もあり、貸切使用ができるとのことであった。また最低 3 日前までに予約、最低一人 600 元からという高級レストランもあり、若い中国人が高級車で乗り付けていた。路地で庶民の安い食堂も多く見たので、その格差にショックを受けた。

11. フォーラム後の楊剣龍教授からの連絡

帰国後、すぐに楊剣龍教授から今回のフォーラムを取りあげた新聞等の記事や写真が送られてきた。また、10月18日には「論文集が广西师范大学出版社から2012年4月に出版されることが決まったので、修正論文を11月末までに送るように」との連絡が来た。何とか手直ししたものを送ったが、疲労が重なって、この後体調の悪さに悩まされた。

2012年6月に『老舎与都市文化』と題する論文集が送られてきた。私の論文は章が改編され、最後の章の中の「現代」の2字が「当時」に変えられていたが、無事掲載されており、楊剣龍教授の手際の良さに感動を覚え、御尽力に感謝した。

12. 第6回老舎国際シンポジウム(2012年10月中・下旬予定)

フォーラム時にも聞いていたこの大会についての予備招請状が主催者の漳州师范大学・張桂興教授から2012年5月に届いた。出席するつもりだが、果たしてどうなることやら…。

『剣北篇』再読

布施 直子

老舎は1939年6月28日より12月9日までの間、日本の軍事侵攻が行われていた戦地への慰問団に文協(中華文芸界抗敵協会)からの代表として加わり、他の10名ほどの代表メンバーと共にトラックで6ヶ月間の慰問の旅をした。旅の見聞と、それに触発された思索は、老舎が全行程を踏破して重慶に帰ってのち、行程の順に長詩の形式で1篇ずつ適宜数種の刊行物に発表された。それらが一冊にまとめられ、単行本の長詩『剣北篇』として出版されたのは1942年5月である。

小引と27段からなり、各段の表題には行程で経た地名が用いられている。慰問団の全行程のうち後ろの部分、甘肅省の石咀山、寧夏、中寧、固原、平涼、邠縣等の地での見聞は、書かれることがないまま出版された。

老舎は詩によって自分の紀行を叙述すること、しかも毎行末を一韻到底の「轍」でそろえるという難題に挑んだ。抗戦期には長詩が多く書かれている。『剣北篇』中の詩は、短いものでも100行以上あり、最も長いのは、第25段「宜川—清澗」の194行である。当初1万行の詩を書くという、老舎の計画であり、また材料はあったろうが、出版された『剣北篇』は小引と27段を合計して3629行。行数の多さには驚くが、少ない文字数で1行になっているものも含んでいる。

1942年出版という事情から、1980年代でも、残存していた『剣北篇』の原本の冊数は極めて限られていたという。原本に接することのできる機会が少なかったためもあったろうか、老舎の他の作品に比べて『剣北篇』は、読まれることが少なかったといえる。

『剣北篇』の各段は、段ごとに移動の状況と

それに伴う風景の叙述、眼前に展開する自然の険しさや美しさに対する、素直な感嘆、人間の力に対する敬服の念、それらに触発された老舎の思いが述べられる。移動を阻害するさまざまな困難があるが、それを乗り越えて次の目的地へ向かう。

慰問の行程は四川省の重慶市を出発して、陝西省に入り、西安を経て、河南省、湖北省に進み、河南省にまた戻り、再度西安へ、西安から黄河の流れと平行に北上し、延安を経て、榆林に至る。榆林が最北であり、そこから南下し西安に戻る。続いて甘肅省のいくつかの軍事要地を訪れ、四度目の西安へ戻り、重慶へ帰還したのだが、甘肅省の訪問地について、詩は書かれなかった。訪問のあとさきと詩の段の順序は一致している。

6月重慶を出発して、蓉城（成都）・綿陽・梓潼・劍閣（2段）、夔門・劍門・広元（3段）褒城・漢中・留坝（4段）、留侯祠（5段）、双石鋪（鳳県）・宝鶏（6段）、宝鶏車站（7段）、西安（8段）、潼関（9段）、靈宝・陝州（陝県）（10段）、洛陽（11、12、13段）、臨汝・葉県（14段）、南陽（15段）、老河口（16段）、襄樊（襄陽・樊城）（17段）、邓県・内郷・西峡口（18段）、長安（20段）、臨潼・彌山・終南山（21段）、徑陽・三原・耀県・中部（黄陵）（22段）、洛川・黄龍山・宜川・秋林（23段）、宜川・富県・甘泉・延安・永平（24段）、清涧・九里山・绥徳・塩湾・米脂・鎮川堡・十里山・榆林（25段）、清涧・永平・洛川・同官・耀県・三原（26段）、華山（27段）の各地を経て、西安以東120キロに位置する華山に至る。27段は華山に登攀し眼下に広がる景観を見渡し、感慨を叙し、「秋風秋色、雁字斜列在天辺」の一行で締めくくられる。

1939年という老舎は40歳、既に「駱駝祥子」を初め長短篇の代表作を世に送り出していたが、中国内陸への旅は初めてのことで、この慰問の旅での見聞を高揚した口吻で書いている。1937

年7月の日本軍の北京盧溝橋突破による全面戦争化が、老舎にそれまで住んだ済南に妻と子を残して単身武漢へ脱出する決心をさせた。それから2年、老舎は日本軍による市街地への爆撃にさらされていた「大后方」の重慶市で、文協の活動を実質的に支えていた。

『劍北篇』は、日本の爆撃下で大地が荒廃し、平穏な日常の生活を奪われた人々の状況、軍とともに戦う人々のようすを叙述している。日本の敗戦までにはなお6年を要したのだったが。老舎が自身の目で見、体験し、そこから触発された思いを叙述しているところから、『劍北篇』には、当時の老舎の戦争に対する感じ方が表れており、老舎の目を通した時代の証言として読むこともできる。慰問団としての役目は、部隊に錦旗を送ることで、同時に部隊の将兵や、傷病兵との交流の機会ももっている。名もない老人や、抗戦下で文化的な活動をする知識青年とも対話し、抗戦下で「耐える」ことの重要性を率直に語りかけ、また抗戦下の文芸活動の、あるべき姿についても語っている。

朗読して聞かせるのに響きがいよいよと考え、「一韻到底」の制約を自身に課し、それに縛られて表現がまわりくどくなったり、語の位置を入れ替えたところもあった。老舎本人が「これが詩だろうか？」と自問してもいる。老舎は歴史を背負って受け継がれてきた文化財への尊敬の思いも表出している。抗戦下の中国の大地のさまざまな様相、人民の戦いの姿に接し、賛美し、自らを中華民族の後裔として位置づけている。

『劍北篇』小引では老舎の侵略者に対する怒りと戦いの覚悟とが表明されるが、それに続く、成都から綿陽・梓潼・劍閣・夔門・劍門を経て広元へ至る四川省内では、むしろ初めて見る自然の景観に圧倒され、驚嘆する叙述が印象深い。

老舎の情感が惻惻として伝わってくる詩のひとつ、7段の「宝鶏車站」で、老舎は家族を残し

て済南を脱出した自分の思いを重ねるようにして、宝鷄駅に集まり、歓喜と賑わいをみせる家族や友人の姿を叙述し、驀進する機関車に抗戦への思いを重ねている。

(第5行) 在风雨或月明的夜间, 无论是青岛还是平津济南, / 远远的, 断续的, 我听见, / ——一听见就引起一阵悲酸—— / 那火车的汽笛忽长忽短, / ……

(第21行) 声在车前, 先把消息送入车站, / 把多少忧疑关切与悬念, / 突然的变作狂涌的欣欢! / 老友们, 也许十载未见, / 父子夫妇, 相别数年, / 都手握着手, 肩并着肩, / 教热泪流湿了笑颜! / 孩子们, 争着搬动筐篮, / 想立刻打开远地来的神秘的瓶罐, / 或尝一尝匣中的糕点, / 快活得好似要过新年! / 啊, 多少人世的离合悲欢, / 都在这不入丝弦, / 没有韵调的鸣声里涌现!

(第39行) 从七七抗战, / 在青岛与济南, / 天明, 黄昏, 或夜半, / 我听见, 我听见, / 那汽笛, 那战争的呼唤! / 啊, 多么勇敢, 多么果断, / 拖着兵车, 野炮, 炸弹, / 冒着轰炸, 冒着危险, / 开往前线, 去应战, / 啊, 伟大的中华去应战, 应战!

又、同詩中で、脚の短い日本人の商人たちが語られる。彼らは軍艦で中国の地を撤退する。

(第55行) 当海风把青岛的晚雾吹残, / 或星岛外横起来灰蓝的晚烟, / 汽车引着车声, 来自济南, / 成群的矮脚的小商小贩, / 带着在中华挣下的银钱, / 或几包未能卖完的“白面”。 / 矮的人, 矮的家眷, / 都收起往日的骄狂傲慢, / 含着泪, 低着头, 走出车站; / 海边上横列着黑黑的一片, / 是他们的巨大的战船, / 也逗不出他们的一个笑脸!

10 段の「豫西」では日本軍からの農村への空襲のようすが叙述される。

(第51行) 当我们在枣林里休息, / 那安闲的树影, 与香甜的空气, / 仿佛是在渊明的诗境里; / 当我们到枣林里去避空袭, / 老幼都匆忙的把牛马掩避, / 静美的田园, 紧促的呼吸, / 赤裸的玩童把手脚抓紧了大地; 这忽静忽动, 忽缓忽急, / 这田园的诗境与杀人的利器, / 使现实与梦境断了距离; / 这不是梦, 而是个谜, / 历史的美丽是它的谜底!

27 段の「華山」で、老舎は『劍北篇』の旅の最後に、経てきた戦闘の地を眼下に望み、抗戦の覚悟を述べる。

(第104行) 东望, 渭络与黄河离合婉转, / 大河浩浩, 渭水回环, / 细细的络水, 流动中间; / 金沙秋色, 分入三川, / 陇海铁路微微的一线; / 大河的对岸, 起伏着层峦, / 山色淡黄, 烟沙无限, / 那就是宝血染成的中条山! / 十八里外, 便是潼关, / 粉碎寇敌的巨炮, 声声传到华山。 / 浩荡苍茫是华山的北面, / 登高放眼, 战场便在面前, / 山连水绕, 无限的风烟, / 使人要狂呼, 要长叹, / 噢, 男儿的热血, 要洒给抗战, / 要洒给这奇伟的高山大川!

【あとがき】

『劍北篇』は、老舎の作品中で読まれることの比較的少ない作品なので、27 段ある長詩のできるだけ多くを紹介したいと思ったのですが、拙文は、あまりにも足りないところばかりの紹介で、忸怩たる思いです。一度『劍北篇』に取り組んで以来、15 年以上も見向きもせずになっていたのですが、昨年 10 月、「老舎と都市文化」のテーマで中国老舎研究会が小規模の研討会を開催しました。そこで、舒乙氏が『劍北篇』について話されるのを聴く機会を得たことと、「会報に」投稿するために、当時のノートなどを取りだして、もう一度読んでみました。『劍北篇』に対する苦手意識が消え、親近感さえ感じられるようになりました。

随想 老舎のふるさと

杉本 達夫

昨11年10月半ば、上海師範大学でシンポジウム「老舎与都市文化」高峰論壇が催され、そこに提出された論文が分類整理されて『老舎与都市文化』①となり、本年5月、早々と出版された。シンポにはわたしも案内をいただいていたが、メンバーを絞った“高峰論壇”とあっては、とうていわたしの出る幕ではないと、即座に参加をあきらめた。顔を上げて言うことではないが、わたしはもはや新しい論文は書けないし、漢語で議論もできないのである。

老舎とゆかりの都市となれば、当然ながら北京、北京を描いた作品（北平も区別なく北京と呼ぶことにする）に、多くの論者の目が集まる。なかでも孫潔女史の「北京在老舎新中国時期文学創作中的隠現」②に、わたしはとりわけ興味をひかれた。女史は老舎が生涯に3度北京に帰ったという。3度とは『離婚』『四世同堂』『茶館』であり、創作上の壁にぶつかったとき心のふるさとたる北京に救いを求めたことをいう。

日本語の語感からすれば、ふるさととは田園や山川の風景に結びつくものであって、大都会をいうには違和感がある。だが、老舎に限っていえば、心に生きる北京をふるさとと呼んでよいのだろう。

老舎と北京の関係は、三つの時期に分けることができるだろう。

- I. 1899-1924: 清末に生まれてから、イギリスへ旅立つまで。北京に生き、北京そのものを呼吸していた時期である。
- II. 1924-1949: ロンドン時代から山東時代、抗日戦期、アメリカ在住を経て帰国するまで。北京を遠く離れていた時期である。
- III. 1949-1966: 帰国から死まで: 北京が共

産党政権下の首都であり、老舎が文化界の指導者、かつ“党的喇叭”であった時期である。

随想「想北平」は老舎の絶唱である。胸かきむしるような望郷の念を、平淡な叙述の中に結晶させた、まさしく珠玉の一篇である。老舎はこれを1936年、すなわちIIの時期に、北京を遠く離れた場所で書いている。ここに綴られた北京の像はIの時期、それも多くは少年時代に出来上がっているだろう。時を経、距離を隔てているがゆえに、現実のさまざまな負の要因が消え去った、いわば脳裏で浄化された像であるだろう。北京に住み続けていたら、こういう北京讃歌は書けなかったにちがいない。かりにこの時36年に、北京に快適な職が用意されたとして、老舎は応じただろうか。いかに懐かしい北京であっても、この時期はすでに日本の傘がひろがり、国難を巡って空気が尖っている。汚濁、腐敗を含めて、臉を閉じれば浮かんでくる“わが北京”とは、似ても似つかぬものだ。だいたい、イギリスから帰国の後、すぐ山東に去ってしまったのは、単に都合よく仕事があったというだけではないだろう。中堅の大人の目に映る北京と、臉の裏のわが北京との乖離が、ひとつの要因だったのではあるまいか。

山東時代は作家老舎がいちばん成果を生んだ時期であり、北京のにおいが溢れる作品を幾つも残している。が、『離婚』であれ、後の『駱駝祥子』であれ、描かれているのは少しばかり前の時代であって、現在ただいまではない。自分が最もよく知る北京、懐かしくも愛しい北京は、時空を遠く隔てるがゆえに、脳裏に保っていられるのではないのか。

アメリカにいる時、『四世同堂』を書き継いだり、英訳を進めたりしながら、そして内戦の動向を気かけながら、老舎はどんな北京像を描いていただろう。すぐにも飛んで帰りたいほ

どに、心を惹かれていただろうか。かつて『新文学史料』の編集に当たった牛漢の回想によれば、牛漢が上海の趙清閣の家で、老舎が1948年にアメリカから寄こした手紙を見せてもらったところ、そこには、趙と二人で暮らすべくマニラに家を買った、と書かれていたという③。マニラというのは、牛漢の記憶違いであろう。手紙はすでに失われて、確かめるべくもないが、牛漢の記憶が正しいとすれば、老舎は帰国するつもりがなかった、少なくとも帰国を熱望していなかったことになる。

1949年末に、老舎はアメリカから帰国し、Ⅲの時期が始まる。思えば25年を隔てた北京定住である。抗日戦期に文協の要であった老舎は、もはや一介の物書きではありえず、制度組織の整備とともに、いくつもの肩書きを持つ身となった。北京は新国家の首都となり、中央となった。老舎は中央組織たる全国文聯や作家協会の重鎮であり、地方たる北京市の文聯主席であり、重責を担う指導者であって、世のため人のために働けば働くほど、肩書が増えた。さまざまな分野のナニナニ協会というのは、すべて共産党指導下の組織であり、運営の実権は黨員にあって、非黨員である老舎にはない。そして、文聯傘下のひとびとの生活の安定は、思想改造と表裏をなす。

龍鬚溝の改修工事を手はじめに、急速に発展変貌してゆく北京に、老舎は“わが北京”を見ていただろうか。ふるさと北京に住んでいる実感があっただろうか。北京における新政府の姿に感激して、党への全幅の信頼を表明し、“党的喇叭”になると宣言して、次つぎと劇を書いた老舎であったが、北京を舞台に劇を書くことと、北京を描くこととは同じではない。度重なる政治運動、批判闘争に心底共感していたか。毛沢東への心服が、運動への疑問を解消していたか。通常感覚では、とうていそうは考え

られない。

運動、闘争は、党組織が指導し、会合を取り仕切る。老舎は非黨員であるが、主席なり副主席なりの地位にある以上、発言なしでは済まない。たとえば、胡風反革命集団糾弾運動の際の老舎の発言④など、いかにも運動の方向に調子を合わせた、人も言いも言う風な内容である。老舎と胡風は文協結成以来の友人であり、胡風は文協の研究部主任として、最も熱心に活動を支えたひとりであった。性格的に欠陥が多いとしても、いわば文協の同志である人物を、反革命分子として非難するなど、本心であるはずがない。この時は梅蘭芳も巴金も氷心も、誰もかれもが似たような、心にもない発言をしているのであり、老舎の発言はごくおとなしい。また、老舎が自分で文章化したのか、だれかが代筆したのか、知るべくもないが、いずれにせよ、こういう発言を余儀なくされることは、老舎にとって耐えがたい苦痛であるはずである。自分が思想改造を終えていないから苦痛に感じるのだ、と考えたとすれば、苦痛は幾倍にも重層化する。にもかかわらず、大躍進の時には入党を申し出ているのであるが。

一介の“作家”でありたい老舎にとって、肩書を重ねた自分は、ふるさとに生きる自分ではない。中央となり、変貌を遂げてゆく目の前の北京は、自分を慰め安らげ、作家たらしめる北京ではない。ふるさと“北京”は失われたのである。文革は“北京”の喪失を決定的にした。風物ばかりか、人心をも変えた。あの日、老舎に暴行を加え続けたのは、北京の少女たちである。「毛主席は分かってくれている」はずの老舎を、毛主席に忠誠を誓う少女たちは、敵と信じて疑わなかった。老舎が愛する北京の庶民は、当然ながら老舎を守れなかった。ふるさとならざる北京で、老舎は命を絶った。

「ふるさとは遠きにありて思うもの」「異土

のかたいとなるとても 帰るところにあるまじや」と犀星は歌い、「石をもて逐わるごとく」ふるさとを離れた啄木は、洪民村を恋い、「思い出の山、思い出の川」を歌った。ふるさととは、やはり遠く離れて思ふべきものなのであろうか。「月は故郷明」と杜甫は詠んだが、月もまた異郷で、遠い故郷を想いながら眺めたほうが、味わい深いのではあるまいか。杯の中のものも。

2012. 7. 21

- ① 楊劍龍編『老舎と都市文化』 広西師範大学出版社、2012年5月刊。
- ② 同上、165-174ページ。
- ③ 牛漢口述、何啓治・李晋西編『我仍在苦苦跋涉』201ページ。生活・読書・新知三聯書店、2008年7月刊。
- ④ 老舎「看穿了胡風的心」。『堅決徹底粉碎胡風反革命集團』1。63ページ。人民出版社、1955年6月刊。

上海の視点からみた老舎—楊劍龍主編『老舎と都市文化』

瀬戸 宏

北京と上海が画然と異なった都市であることや両者の仲の悪さは、昔からよく知られている。生粋の北京人である老舎も、上海は好きではない、と公言している。では、その上海の視点から老舎をみるとどうなるか。この問いを考える手がかりになる書物が最近刊行された。楊劍龍主編『老舎と都市文化』（『老舎と都市文化』）である。以下、本書と略記する。

本書は2012年5月に広西師範大学出版社から出版された。2011年10月15、16日、中国老舎

研究会、上海師範大学都市文化研究センターの主催により上海師範大学で開催された「老舎と都市文化サミットフォーラム」（老舎と都市文化高峰論壇）での報告をもとに編集されたもので、370ページあまりの論文集である。「老舎と都市文化」の会議主題にふさわしく、36編の論文が、都市空間と文化心態、ロンドン体験と山東体験、都市経歴と都市印象、都市叙事と名作解説、新中国話劇と都市イメージ、都市批判と文化衝突、都市描写と比較研究の7部に分けて収録されている。このフォーラムはもともと国際会議として企画されたが、準備の都合で国内会議となったとのことである。しかし、本書には中国人研究者のほかにも、高橋由利子氏の論文も収録されている。本書付録の解放日報記事に拠れば、倉橋幸彦氏もフォーラムには参加したとのことである。

もちろん、上海で開催されたからといってただちに会議全体が上海色に染まるわけではないが、参加者をみると上海関係者がかなりおり、自覚的に「上海」を強調した論文も何本かある。本書の全体を紹介することは紙幅の関係から不可能だが、“上海の視点からみた老舎”の特色がよく出た論文を中心に、本書のいくつか特徴的な傾向を紹介したい。

真っ先に挙げなければならないのは、馬暉・王万鵬「“老北京”と“大上海”の対話——老舎と張愛玲の都市描写比較研究」、楊迎平「異なった都市 異なった心情——老舎と穆時英小説比較談」であろう。二本とも、上海を正面に据えて老舎を論じている。

馬暉・王万鵬(共に甘肅連合大学人文学院)論文は、老舎が描く北京は愛情を感じさせ民俗の味に満ちているのに対して、張愛玲の筆の下での“都市”は人を窒息させ絶望させる狂った世界であり、世界の終わりが到来する死の雰囲気満ちている、と指摘する。

楊迎平(南京曉莊学院人文学院)論文は、北京

と上海の比較をもう少し掘り下げて、「老舎が表現したのはこのような郷土的な古い都市であり、穆時英が表現したのは、現代的な若い都市である。古都にはその荘厳と成熟があり、しかも深い文化の内包があるが、遅れと腐敗もある。上海という都市には浅薄、俗っぽさや狂った歌、酔いの中のダンスもあるが、モダン、新しさや現代の息吹もある」と指摘している。

また、鳳媛(華東師範大学)「“新北京”城の“老北京人” — 『龍鬚溝』『茶館』から老舎 1949 年以後の創作困難状況をみる」は、人民共和建国後『生日』『春華秋実』『青年突撃隊』『西望長安』など当時の普遍的な政治課題を扱った戯曲を執筆し、いずれも不満足な結果に終わった老舎が、かつて三十年代に『猫城記』などの失敗の後「北平に救いを求め」、『離婚』執筆に成功したように、再び北京に向かうことによって『茶館』『正紅旗下』のような名作を創作できたことを指摘し、興味深かった。

残念ながら、今回の論文の多くは、老舎と上海作家(張愛玲、穆時英)の単なる組み合わせの比較に留まったり、北京・上海の都市的特徴についてもすでに通説になっていることの確認、繰り返しに終わったりしているものが大半で、新発見には乏しいといわざるをえない。老舎と上海を比較することによって、それまで誰も気がつかなかった老舎作品のより深い意味や北京、上海の新しい特徴がみえてこなければ、研究上はあまり意味がないのである。

しかし、私は本書の諸論文を通読して、やはり上海の特徴を感じざるを得なかった。それは、本書巻頭の関紀新「早期老舎の旧北京人文審査閲読心理状態の一瞥」を除いて、誰も少数民族作家、満族作家としての老舎を論じていないことである。関紀新論文が本書にあるのは、彼が中国老舎研究会会長だからであろう。

たとえば、劉暢(上海師範大学)「“農民都市に

行く”：『駱駝祥子』と新時期小説の都市描写」、鄧富華(復旦大学研究生)「都市遊民形象の古今変化—『駱駝祥子』を中心に」は、いずれも『駱駝祥子』の祥子と改革開放後の新時期小説(鄧富華論文は建国以前の作品比較も含む)中の都市出稼ぎ農民の人物像を比較したもので、それ自体は興味深いものであるが、この二人の上海の研究者は、祥子の民族所属についてはいずれも何も述べていない。その結果、祥子の北京城内行きは、漢族青年農民一般の都市出稼ぎと同じものとして捉えられてしまうことになる。

私が昨年の日本老舎研究会大会報告で述べたように(後に「老舎『茶館』と満族意識試論」として論文化①)、関紀新はすでに祥子を満族とする見解を発表している。祥子を満族、特に北京近郊の満族とみた場合、その北京城内行きは新時期小説の農民出稼ぎとは、その持つ意味が大きく異なってくる。新時期小説の農民出稼ぎは、都市と農村の格差、文化差異とその中の人間像を描くもので、多くの場合その都市は中国の他の大都市と置き換え可能である。しかし、祥子を満族とした場合、彼が行く都市は関紀新が力説しているように、必ず北京であり、上海や天津であることは不可能なのである。

上海の研究者にとって、老舎はまず中国人作家であり、漢族か満族かは重要な問題とは考えられていないのであろう。これは、成立・発展にあたって少数民族の関与がほぼ皆無であった上海という都市の性格とも関係していよう。関紀新の説自体、説得力をもつものではあるが、現段階では彼個人の意見であることも否定できない。

ただ、研究のあり方としては、先行研究として祥子を満族とする見解がすでに提出されている以上、それに対する検討を加えてから自己の見解を述べるべきであり、それをしないのは研究者として怠慢ではないかと、私は思った。そ

れとも、老舎および老舎作品と少数民族の問題は、私が推測したようにやはり“敏感”な問題なのか。

ともあれ、本書は中国における老舎研究の広がり、多様性を示すものとして興味深いものであった。本書刊行を機に、さまざまな観点からの老舎研究がより発展することを期待したい。

- ① 瀬戸宏個人研究HP「電腦龍の会」研究業績欄にPDF版で全文転載。電腦龍の会で検索した方が簡便なのでURLは省略。

× × × ×

本論の趣旨とは関係ないが、『日本老舎研究会会報』に執筆の機会を与えられたのを機に、本会報のあり方について一言述べておきたい。本会報が日本での老舎研究の重要な資料であることは論を待たないが、本会報は私の知る限り、国会図書館も含めてどの図書館にも所蔵されていない。その結果、過去の本会報掲載論文を参照しようとしても参照できない事態が起きている。近年の日本での中国現代文学研究の最も詳細な目録である藤井省三監修『中国文学研究文献要覧・近現代文学 1978-2008』（日外アソシエーツ 2008）にも、会報掲載論文は一つも収録されていない。この状態を打破するため、私はたとえば老舎研HPを開設し、そこに会報バックナンバーをPDF版で掲載することを提唱したい。老舎研究会役員、会員のご検討をお願いしたい。

【事務局から】

瀬戸宏会員のこの提唱を受け、紅粉芳恵会員の御尽力により、老舎研究会HPを開設いたしました。

詳細については、巻末の紅粉芳恵【会務報告・HP開設】を参照して下さい。

書評：傅光明著『書信世界里的趙清閣与老舎』（復旦大学出版社、2012年3月）

杉野 元子

筆者は以前、杉本達夫著『日中戦期老舎と文藝界統一戦線——大後方の政治の渦の中の非政治——』（東方書店・2004年）の書評「四半世紀に亘る老舎研究の精華」（『東方』第292号、2005年6月）の中で、次のように書いた。

本書〔『日中戦期老舎と文藝界統一戦線——大後方の政治の渦の中の非政治——』〕は、日中戦期の老舎を文協という組織の中で位置づけることにより、新しい老舎像を描き出すことに成功したが、この時期の老舎を考えるさい、もう一つ見逃すことができないことは、趙清閣の存在である。筆者は、中国で開かれた老舎学術研討会に数回参加したことがあるが、公式の場では触れられることはないものの、研究者同士が食卓を囲んだ際などには、老舎と趙清閣との関係がよく話題となる。趙清閣（一九一四年～一九九九年）は、一生独身で通した。生前、ごく親しい人には老舎について語る事があったそうだが、公的な場所では発言を拒否し、また老舎からの手紙は、生前すべて処分してしまった。老舎の遺族側もこの件については一切口を閉ざしている。

したがって老舎と趙清閣とのことは、現在の段階では憶測でしか語る事ができず、本書の著者もこの問題については触れていない。一九四三年、老舎は六月から趙清閣との共同執筆戯曲『桃李春風』に着手し、十月に発表する。そして十一月には、胡絮青夫人と三人の子どもがはるばる北平から苦難の旅を続け

て北碚に到着し、六年ぶりの再会を果たす。

著者は⑧〔「『桃李春風』と一九四三年の老舎』〕の中で、老舎は趙清閣の困窮を助けるために戯曲『桃李春風』の合作を働きかけたと推測する。また⑨〔「抗日戦期の老舎と胡絮青夫人』〕では、老舎の短篇「一封家信」、「恋」の中から老舎の夫人に対する深い感謝の念を読みとる。これらの指摘はいずれも当を得たものであるが、しかし老舎は、単に一人の友人を助けるという意味合いでのみ、趙清閣との共同執筆をおこなったのであろうか。また妻子と再会した老舎は、当然ながら喜びがこみ上げたであろうが、そのいっぽうで二人の女性の存在により、深刻な葛藤を抱えることになったかもしれない。もし将来、老舎と趙清閣とのことが何らかの形でより判然とすれば、日中戦期の老舎の新たな側面が切り開かれることとなるであろう。

このように老舎・趙清閣問題については、これまで老舎研究者の多くが関心を寄せながらも、正面から深く掘り下げ、論じられるということにはなかった。今回書評の対象に選んだ傅光明著『書信世界里的趙清閣と老舎』（以下、『書信』と略す）は、この問題について、かなり踏み込んだ調査をおこない、新資料を数多く提供したという点において、大きく注目されるのである。

傅光明は1965年生まれで、現在は中国現代文学館研究員の職にある。2004年に日本老舎研究会の招きで来日して講演をおこなったので、本会報の読者の中には顔見知りの方も多はずである。傅光明は1993年から老舎自殺前後の状況を知る関係者への取材に着手し、1999年に『老舎之死探訪実録』（中国広播電視出版社）、2001年に夫人・鄭実との共著『太平湖的記憶——老舎之死』（海天出版社）、2009年に『老舎之死口述実録』（復旦大学出版社）を刊行した。そ

の後、2007年には河南大学博士論文をもととする『口述歴史的な老舎之死』（山東画報出版社）、2011年には復旦大学ポストドクター研究報告をもととする『老舎与中国現代知識分子的命運』（復旦大学出版社）、そして2012年3月には『書信』を出版した。傅光明は現在、中国における老舎研究の最前線で活躍している研究者の一人である。

* * * * *

『書信』は、「本論」と「付録」で構成されている。「本論」は28章からなり、傅光明と韓秀（Teresa Buczacki）との交流の様子が描かれている。韓秀は1946年アメリカでアメリカ人の父親と中国人の母親との間に生まれ、1948年2歳で中国に渡り、1978年アメリカに戻るまで、長く激動の中国で暮らした。韓秀は趙清閣と親戚関係にあり、一時期、老舎とも身近に接していた。傅光明は2009年12月、アメリカ在住の韓秀にメールを送り、老舎と趙清閣に関する質問をするが、これを契機として、二人の間で頻繁にメールや手紙が交されるようになる。

「本論」では、傅光明によって、2011年1月までの二人のメールや手紙の内容の一部を引用しながら、二人が老舎と趙清閣、さらには文学観や人生観などについて語り合った内容が綴られている。「本論」の特筆すべき点として、まず一点目は年齢も離れ、一面識もない二人がメールや手紙で交流を重ねるうちに、相手の誠実な人柄を認め合い、真摯に仕事や家族・友人に向き合う姿勢に惹かれ合い、次第に強い信頼関係で結ばれるようになるまでの過程が描かれていて、一つの希有な友情のあり方が提示されていること、二点目は貴重な写真、たとえば趙清閣の若い時期から晩年に至るまでの写真、老舎が趙清閣に送った手紙や詩の写真、趙清閣が韓秀に送った手紙の写真などが多数掲載されてい

ること、三点目は韓秀の目に映った老舎と趙清閣の姿が明らかにされていること、である。

三点目について、一つだけ具体例を示す。韓秀は2009年12月10日付メールの中で11歳の自分が目撃した老舎の様子を生き生きと描写している。

私は物心がつくようになってから、私の生活の中には、「舒おじいさん〔老舎〕」という存在があった。彼が私の家に来ると、母方の祖母は彼を「舒さん」と遠慮がちに呼んでいたが、大事が起きた時には「舒慶春」と呼び捨てにした。たとえば1959年、上海の映画製作所は清閣おばさんに「三面紅旗」を称える台本を書きなさい、書かなければ給与を停止すると迫った。給与が止まれば、清閣おばさんは餓死するよりほかなくなる。この上海からきた手紙は、私が舒家に届けに行き、舒おじいさんといっしょに花に水やりをしているときにこっそりと手渡した。舒さんは妻に、私の祖母が病気になったのでお見舞いに行かなければならないと告げ、部屋に入り服を一枚はおり、私の手をとって出て行った。私たちは八面槽貯蓄所に立ち寄り、普通預金の口座を閉じて、800元を引き出した。〔中略〕彼は家に着き、私の祖母に会うと、すぐにお金を取り出し、祖母に上海へ送ってくれるように頼んだ。

祖母はその日ずっと彼の名前を呼び捨てにし、あなたは清閣をだまし、身の落ち着き先が見つかると思ひ込ませた、そうでなければ、彼女はとっくの前に去っていき、こんな苦勞をせずすんだ、と言った。

私は、清閣おばさんが舒さんのために大陸に留まることにしたことを前々から知っていた。そうでなければ林語堂などとの友情、国民政府との良好な関係からいって、彼女には必ず留まらなければならないという理由はま

ったくなかった。

舒さんは押し黙り、顔には切なく悲しげな表情が浮かんでいた。それは私が目にした舒さんのもっとも不甲斐ない姿の一つだった。

「本論」ではこの他にも、老舎の死後、趙清閣が30年間ずっと、老舎のために朝晩線香をあげていたことなどについても言及がある。これらのことから、老舎と趙清閣との絆は相当強固なものであったこと、そして老舎は妻と趙清閣との間で板挟みとなり悩み苦しんでいたことが想像される。

『書信』『付録』は、11の部分から成り立っているが、その中の「趙清閣致韓秀信(8通)」、「趙清閣信(4通)」、「老舎致趙清閣信(4通)」の3つの部分に、老舎と趙清閣の書簡が収められている。「老舎致趙清閣信(4通)」は、1955年から1964年までの間に老舎が趙清閣に送った書簡が収められている。1955年4月25日付書簡で老舎は、趙清閣が書いた戯曲の登場人物の名前を用いて、自分のことを「克」、趙清閣のことを「珊」と呼び合っている。このようなことから二人の親密さがうかがい知れる。

「趙清閣致韓秀信(8通)」、「趙清閣信(4通)」は、韓秀が保管していた趙清閣書簡12通に自身の注釈を加えて、傅光明に提供したものである。「趙清閣致韓秀信(8通)」は、1987年から1997年までの間に趙清閣が韓秀に送った書簡が収められている。これらの書簡と韓秀の注釈を合わせ読むと、趙清閣の短編小説「落葉無限愁」(1947年)および趙清閣自身が書いたこの小説の解説「『落葉』小析」(1989年)が、老舎と趙清閣との関係を探るための重要な手がかりになることがわかるが、『書信』『付録』にはこの二編の作品も収められている。「趙清閣信(4通)」は、1989年の端木蕻良宛書簡1通、1991年から1995年までの韓秀宛書簡3通が収められているが、趙清閣が晩年、病魔と闘い

ながらも、文学活動への熱意を失わなかったことをうかがい知ることができる。

* * * * *

以上、『書信』の内容について、老舎と趙清閣に関わる部分に焦点を絞りながら紹介してきたが、『書信』が明らかにしているように、1937年以降の老舎を研究する場合には、趙清閣の存在は無視して通れない。傅光明著『書信』は、老舎研究者にとって必読の基礎的文献であるといえよう。

最後に、『書信』について残念に思ったことを三点書き加える。まず一点目だが、筆者は『書信世界里的趙清閣と老舎』という書名を目にしたとき、傅光明が老舎と趙清閣との間で交わされた書簡を新たに発見したのかと思い、胸を躍らせた。しかし期待ははずれ、「付録」に掲載されている「老舎致趙清閣信（4通）」は趙清閣編『滄海往時——中国現代著名作家書信集錦』（上海文芸出版社、2006年）で発表されたものの転載だった。二点目は、『書信』が初出となっている文章が全体の半分にも満たないことである。たとえば、『書信』「本論」の前半部分、および「付録」の「趙清閣致韓秀信（8通）」は、傅光明の前著『老舎与中国現代知識分子的命運』の「付録」で発表されたものの転載だった。三点目は、『書信』「本論」には、傅光明と韓秀との間で交わされたメールや手紙が引用されているが、そこで語られた内容は多岐にわたり、老舎と趙清閣に直接関わる部分はそれほど多くないことである。

現在、傅光明は『老舎伝：他這一輩子』の執筆にとりかかっている。徹底した聴き取り調査と綿密な文献調査を積み重ねてきた傅光明が描き出す老舎像がどのようなものになるのか、その出版が大いに待ち望まれる。

「老舎的生死観」を読んで

吉田 世志子

呉小美・魏韶華・古世倉の『老舎与中国新文化建設』①には、八本の論文が掲載されている。その中の「老舎的生死観」について感想を述べたい。

この論文は老舎の死生観を、三つの核心——
Ⅰ. 現代意識と憂国の情は互いに通じあうこと
Ⅱ. 文人氣質と価値の尺度 Ⅲ. 老舎の悲しみの情——から述べたものである。

孔子、孟子の時代の中国の文化人の意識から解き始め、五四運動から文化大革命までを含み、絶えず魯迅と比較している。さらにヘーゲルの哲学、エミール・デュルケームの自殺論、ジャック・ロンドンの自殺、フランツ・カフカの哲学、マヤコフスキーの自殺まで動員して論じている。あまりの壮大さに、著者自身目が回っている気がしないでもない。しかし華やかな大仕掛けの中に、作者がはっきり言いたくも言えない“何か”を筆者は感じ取って、敬意を表する次第である。いずれその“何か”を具体的に論じたいと思っている。

しかし、どうしても納得できない一点があり、今回はそれにもみ絞って感想を述べたい。

気になる部分は、老舎の作品を老舎自身の自殺のリハーサル（預演）として捉えていることである。さらにそのリハーサルの最も真に迫った例として『四世同堂』の次の箇所を引用していることである。

最も真に迫ったリハーサルは、当然祁天佑の投身自殺である。護城河及び太平湖の冷たい水は、研究者が醒めた頭脳で老舎の死亡観を研究するのを助けた。私たちは老舎の高ぶり醒めていく筆遣いが、祁天佑が城壁に寄り

かかりながら、“のろのろいく”のを描写するのを見た。「水は流れが速く、もう我慢できずに彼を待っているようで、水がかすかに音を出し、彼に向かって低い声で、呼びかけているようだった。素早く、彼は一生の全てを思い起こした。素早く、彼はすべてを忘れた。漂って、漂って、漂って、彼は大海に浮かび、流れて行った。自由で、さわやかで、清潔で、愉快で、さらに彼の胸の赤い字を消してくれた」②

周知のように『四世同堂』のこの引用部分の前には、祁天佑が日本軍に殴られて、ゼッケンを着せられ、ピストルをつきつけられて、街中をひきまわされ「私は奸商だ」と叫ばされた描写がある。したがってここでの水の役割は、無実の罪をきせられ、日本軍の言いなりになってしまったみずからの「汚れ」を洗い流すためなのである。日本軍に殴られ、ピストルで脅されてさせられたとしても、彼は自らを許すことはできなかつたし、この汚れに耐えられなかつたのである。この部分を、短絡的に老舎の自殺に擬えるのは納得できない。これだと、まるで老舎も紅衛兵に屈服して自殺したようではないか。

周知のことながら、老舎は紅衛兵に「資本主義の手先」と殴打されても決して認めなかつた。それゆえひどく殴られ、翌日また文連の事務所に来るように言われたのである。翌日老舎はそこに行かず、太平湖に行き入水したのである。③

小説の重要な部分の質的転換の方法として、登場人物を“自殺”させたり、“他殺”したりすることは、内外の多くの作家の常套手段である。そのことによって作品を重厚にして成功する場合もあれば、駄作におちいらせる場合もある。

老舎も作品の流れを変える質的転換の方法

として、登場人物を自殺させた。その成功例が『四世同堂』の祁天佑入水自殺の描写であり、『茶館』の王利発の自殺の描写である。だがそれはあくまで作品上のことである。確かに作家本人が生き悩んだとき、彼が小説に描いたように、自殺も選択肢には入るだろう。同じ人間である以上、当然である。しかし、作品に描かれた世界の延長上に、直裁に作家の行動をとらえることは出来ない。作家の創作という“フィクション”の作業と、作家自身の“ノンフィクション”の営為を混同していると思われる。“作品”という虚構と、作家の実人生は次元が違うのである。

作家はそれぞれの作品の登場人物をどのように“生きて”いかせるか、あるいは“死なせる”かを、心血を注いで形象するのである。その形象した人物のひとり、ひとりはそれぞれ置かれている状況が違う。母親の生み出す命が、それぞれ個性を持っていると同様である。そのような生みの苦しみをして描き出した人物に、読者は感動するのである。したがって老舎が作品で“自殺”を多く描いたから、それらを実人生のリハーサルだと捉え、その延長上に老舎の自殺を置くのは、作家の“創作”の営為を軽んじるものではないだろうか。作家が形象した人物の“自殺”は、自らの実人生のリハーサルなどではない。作品は作品として、作家の実人生とは独立したものとしてみていきたい。

筆者は、作家が小説に描いた世界を、短絡的に作家自身の実人生の行動に結び付けて論じるのは、その作家の“創作”という営為に対する冒瀆だと考えている。

① 呉小美・魏韶華・古世倉『老舎与中国新文化建設』、民族出版社、2006年12月。

② 同①157ページ。

③ 拙論「老舎の生涯—創作への愛執—」を参照されたい。

老舎関係文献略目 (16)

倉橋 幸彦 (編)

【2009年下半期・補】

東山拓志「老舎と巴金」

『日本の近代文学と中国の新文学—比較考察の一側面』(萌動社、9月21日)第6章 新文学初期の小説 7、p. 107-108

*「北京の貧しい満洲旗人の家に生まれた老舎(1899-1966)は1918年に北京師範学校を卒業し、1924年には燕京大学のエヴァンス教授の推薦により英国に赴いてロンドン大学東方学院の中国語講師となった。彼と同居している許地山(文学研究会発起人の一人)の慫慂もあって小説に筆を染めた。その作品は相次いで文学研究会の機関誌『小説月報』に連載されて高く評価された。こうしてロンドンにいた5年間は「張さんの哲学」(1926)、「趙子曰」(1927)、「馬さん父子」(1929)の3長編を発表し、作中の登場人物をユーモアたっぷりの筆致で描き、ユーモア作家として頭角を現わした。1930年に帰国したころにはすでに文壇で確乎たる地歩を占めるまでになった。本名は舒慶春といい、字は舎予。老舎はその後も次から次へと小説を発表し、新中国になってからは主として戯曲に力を傾けた。初期の長篇小説の代表作と言えば、やはり人力車夫の一生を描いた「駱駝祥子」(1936)である。／老舎の初期の作品はユーモアに凝るあまり、軽薄に流れる感みがある。文芸評論家の李長之も「『離婚』(老舎の長篇小説、1933年出版)(『文学季刊』創刊号、1934.1)という一文で、老舎のユーモアの欠点として「度の過ぎた」ことや「ときどき蛇足のような感じがした」ことを挙げた。」

【2010年・補】

上野恵司「お虎さんは“虎牙”の持ち主？」

『ことばの散歩道日本語と中国語87話』(白帝社、1月9日)IV. 身体部位の話、第36話、p. 84-85

*「老舎(Lǎo Shè)の《駱駝祥子》(Luótuó Xiángzi)は近現代の中国文学作品の中で日本でも比較的よく知られているものの一つであろう。翻訳も何種類かある。1930年代の作品で、駱駝のニックネームをもつ質朴な田舎出の人力車夫祥子が自前の車を手に入れたいという夢が破れて墮落していくまでの姿を克明に描いている。／主人公は祥子であるが、もう一人主要な登場人物がいる。北京の車宿の娘で後に祥子の女房になる虎妞である。口も八丁、手も八丁の男まさりである。／……／さて、ここからが本題だが、わたくしが読み落としていなければ、この虎妞という名前の由来については作者は特に触れていない。触れていないが、この気性の荒い男まさりの女性にいかにもふさわしい命名ではある。／しかし気性の荒さや勇ましさをいうだけならほかにも命名のしようがあるはずである。それを特に“虎妞”(Húniū-虎むすめ、お虎さんといったところか)としたのは、彼女が前回触れた発達した大きな犬歯“虎牙(hǔyá)”の持ち主であったからではないかと推測される。／いつかこの小説が舞台化された時、虎妞を演じる女優さんの苦勞話を報じた記事の中でこの“虎牙”のことに触れられていたと記憶している。小説の作者がわざわざ命名の由来に触れていないのは(父親の劉四爺がまるで虎のようないかつい顔つきで、歯も“虎牙”であるとは言っているが)、或いは中国人には解説するまでもなくわかりきったことではあるからであろうか。」

(再録)

平岡正明「志ん生「らくだ」と老舎」

『志ん生的、文樂的』 [講談社文庫]
 (講談社、3月12日) p. 541-582

◇田中優子「解説」：「その「らくだ」だが、この演目には誰しも抱く疑問がある。それは、死体としてしか登場しないその「らくだ」とはいったい何者なのか、という疑問だ。平岡正明は、これ以外にはあり得ないという解答を持っていた。それはお読みになればおわかりの通りである。こうして江戸の落語は、平岡正明の身体を通して、アジアの深奥にまで達するのであった。」 (p. 595)

楊海英「「糞の垂れた尻」と「お尻の割れた子供服」——過去の「蒙疆」から竹内好と高橋和巳の中国観をよむ——」

『アジア研究』5、3月、p. 41-51

*「高橋和巳は文化大革命が発動された翌年の1967年4月に『朝日新聞』社の特派員として中国を現地調査し、『新しき長城』と題するレポートを『朝日ジャーナル』に連載した。(p. 47) /……/高橋はその後、「一部誤報された紅衛兵による破壊などはない」と伝え、「ほほえましい新旧共存もみられた」としながらも[☆「中国報告 新しき長城(下の1)一激しくすすむ文化の奪権闘争』『朝日ジャーナル』Vol. 9, No. 23]、北京市内の景山公園の中のベンチで茫然と座り込んでいた、「知的専門作業を職とすると思われる中老の紳士」を描いている。「革命が闘争である以上、それを推進し慶賀する人々とともに、必ずしも十分に適応できず、論理と感情のずれに面伏せて悩む一群の人々がうみだされる」と分析している[☆同上]。高橋がこの文を書き上げた頃に、既に日本でも中央音楽院長の馬思聰の国外脱出が報道されていた、と本人も認めている。にもかかわらず、彼は事態の深刻さが読みきれなかつた。たいていの人ならば、景山公園に「茫然と座り込む紳士」から、1966年8月に北京市内の太平湖に入水自殺した

作家の老舎(傅光明2007[☆『口述歴史下的老舎之死』山東画報出版社])を想像するはずであろう。日本では郭沫若の「自己批判」が大きく報道され[☆「郭沫若の自己批判と文化革命』『朝日ジャーナル』Vol. 8, No. 21]、知識界に衝撃がもたらされていたことから考えると、老舎の自殺も重かつたはずであるが、同じ作家としての高橋はその関連性への連想は途切れている。」 (p. 49)

◇<http://hdl.handle.net/10297/5040>

(再録)

齋藤希史「町の音 第六話 老舎『駱駝祥子』
 第七話 愛新覺羅溥儀『わが半生』
 『漢文スタイル』(羽島書店、4月7日) II 境域のことば 1 北京八景——記憶された町、p. 92-99

*「絶望のうちに幕を閉じる『駱駝祥子』は、新中国ではその出口のない悲惨さが忌避されて、末尾の章が大幅に削られるなどの措置が取られた。老舎も、社会の暗黒面のみを見ていたと反省の弁を述べている。「革命の光明を見ず、革命の真理を認識していなかったためである」と。だがその老舎が紅衛兵に吊るし上げられ、文革のさなかに命を落としているのだから、祥子の絶望の出口は、慎重に探す必要があるはずだ。」 (p. 98)

*「はかない喜びとともに祥子が聞いた「妙なる音楽」を、別の耳で聞いた人がいた。清朝最後の皇帝、溥儀である。／溥儀の自伝『わが半生』に、袁世凱時代のこととして、こんなエピソードが記されている。／紫禁城が、朝を迎えると、時々不思議な現象にめぐりあうことがあった。奥深い宮殿にいながら、遠く離れた町なかの音が聞こえてくるのである。よくとおる物売りの声、木の車輪をつけた馬車のガラガラいう音、ときには兵隊の歌声も加わる。太監たちはこの現象を「町の音」と呼んでいた。紫禁城を出てから私は、あれこれと不気味な想像をさ

せたこの町の音をよく思い出したものだ。町の音のうちで、もっとも強い印象を私に与えたものは、中南海の軍楽の演奏が数回聞こえたことである。／「袁世凱が食事を始めたのです」総管理太監の張謙和があるとき私に言った。

「袁世凱が食事をするときには奏樂までするのです。『鐘鳴鼎食』そのもので、陛下以上のふるまいです」／……／溥儀は一九〇六年生まれ、老舎の七歳下であるから、溥儀が聞いた「町の音」は老舎が聞いた音でもあった。物売りの声や行商の車輪の音などはもちろん、袁世凱の軍樂も、あるいは老舎の耳に入ったかもしれない。喜びと屈辱と。絶望と諦観と、北京の近代は、最も高いところで暮らす人にも、最も低いところで暮らす人にも、歴史の津波を襲わせずにはいられなかった。」(p. 98-99)

*「溥儀の家庭教師だったジョンストンは、イギリスに帰ってから、ロンドン大学東方学院中国語科の教授となった。舒慶春が赴任したのはまさにそこである。北京の高い空のなせるわざなのか、車夫と皇帝は、異郷でひそかに縁をつないでいたのであった。」(p. 99)

◇「北京八景 — 記憶された町」の初出は『芸術新潮』59巻8号(2008年8月号)。

(再録)

秋吉久紀夫

「中国作家老舎夫人胡潔青女子訪問記ならびに老舎遺跡探訪記」

『中国現代詩人訪問記』(中国書店、12月8日)一、p. 5-19

*「昨年(一九八四年)十月二日にやって来たから、ここ北京大学には、約四ヶ月滞在していることになる。今日は午後、満洲族出身の著名作家老舎の、生家をはじめ、かれの出た小学校や、中学校、師範学校などと、身を投げた太平湖、墓地のある八宝山、それにかれの夫人胡潔青さんを、王府井の豊盛胡同に訪問する予定で

ある。」(p. 5)

*「まずは老舎の墓地のある八宝山革命公墓へと向かう。[☆後略]／八宝とは古代、この地から八種類の非金属鉱石が採れていたということだが、一九五〇年に、中華人民共和国は、ここにあった護国寺を接收して、北京市革命公墓を建設。一九七〇年に周恩来の発案で、国の主要な革命戦士を埋葬する「八宝山革命公墓」と改称し、現在に至っているのである。公墓は二区域に分けられていて、遺体を埋葬する墓地と、遺骨を安置する霊廟からなっている。」

(p. 5-6)

*「事務所にはいり、老舎の墓の所在を尋ねたところ、単独の墓はなく、墓地のなかの共同墓霊廟に葬ってあるとのことだった。[☆]暗がりのなかを案内されて、恭しく墓参を済ましたが、なぜか灯明が胸のうちで、いつまでも消えずにゆらいている感じがする。享年六九歳。老舎は、死亡して一二年後の一九七八年六月、文革終焉でやっと名譽回復され、この八宝山革命公墓に埋葬されたのである。」(p. 7)

*「再び地下鉄で北京城内にもどり、白塔寺の南にあったという太平湖を探す。周りには枝垂れ柳が列をなし、きっと緑の葉っぱは、静かに湖面を撫でているかも知れないなど思いを馳せたが、なかなか見つからずに狭い路地を左へ右にとくねり、やっとのことで、それらしき場所に辿りついた。が、どこを見渡しても、湖はおろか、小さな池すら見当たらない。／実は現在では、その名の池は見る影もなくなっていて、「あのビルの建設中の辺りだよ」と指差された箇所は、緑一つない地区で、雑然とした作業小屋が立ちならび、その背後には、七階建てと十六階建の高層ビルが建設中だった。」(p. 7)

[☆なお、老舎が入水した太平湖は、解放後に造成された西直門外太平湖である。]

*「文革開始時期の一九六六年八月二五日の早

朝だった。老舎の遺体が、ここ太平湖という池に浮かんでいたという。かれは当時、気管支拡張症で二週間ほど北京医院に入院し、退院したばかりだったのに、すぐに文化大革命の学習会に狩り出され、終日、紅衛兵にひっぱたかれ、自白を強制されていたと聞いているが、その折も折、わたしは初めて北京に来ていた。／ちょうど一九六六年八月六日だったから、死亡は、その十九日後のことである。確かに当時、わたしは北京市内で、真紅の腕章を巻いた紅衛兵の姿を、驚きの眼で眺めたものだ。日中国交回復前に、学術調査団の一員として、やっとのチャンスに喜び勇んで来たしたもの、文化大革命の発生で、急遽、予定を変更して帰国する数日前の事だった。」(p.8)

*「しばらく待つと、内側から扉をひらいて上品な老婦人が丁寧に招き入れてくれた。秋には真赤な灯のような実を、結んでいた柿の木の聳える中庭をよぎり、玄関に立つ。さっきの方が母ですと紹介してくれた。ご本人は老舎の長男の文学者舒乙氏だった。母とは、老舎夫人の胡潔青さんである。楕円形の下段が縁なしの眼鏡の奥から、知性が覗いている。」(p.8-9)

*「——わたしが研究したいのは、「剣北篇」です。主として研究しているのは、中国の近、現代の詩や詩人です。いま北京で研修中です。わたしは魯迅の「野草」や何其芳の「預言」などの訳をし終え、発表の準備中です。／胡潔青さん——「剣北篇」の以前の版本を、あなたはお持ちですか。／——持っています。北京大学の図書館で探し当てて、みなコピーに取りました。／胡潔青さん——老舎が亡くなって二冊の詩集が出版されました。お持ちですか。／——いいえ／胡潔青さん——一冊は香港の出版で、『老舎詩集』[☆曾广灿編、九龍獅子會、1980年12月]で、もう一冊は『老舎新詩選』[☆曾广灿・吴怀斌編、花山文艺出版社、1983年8月]です。／——どちらも持っていません。所有の

七巻の『老舎文集』には入っています。／胡潔青さん——「剣北篇」を研究される方は、いま殆どいませんね。日本でもそうです。杉本達夫という方がいて、以前一篇の短い論文[★「老舎の長篇詩《剣北篇》のこと」：決して「短い論文」ではないと言うに及ばず]を書いておられます。あの方はたぶん抗戦文学の研究者なんでしょう。／——わたしも存じています。／胡潔青さん——あの方も中国に来ていました。帰られてから、わたしに論文を送って来られました。最近では中国国内には、「剣北篇」を研究している人はまったく見掛けません。この版本も探すのに大変苦労します。それは使用している紙が、地方紙[★土紙本]、黄色が掛っていますから。この頃では、こんな本のあることも殆どの人は知っていません。解放後でも再版してないから。それは解放前に重慶で印刷したものです。殆ど手には入りません。」

(p.10-11)

*「胡潔青さん——中山時子さんをご存じですか。もうお歳で定年でしょうが、彼女はお茶の水女子大学に在職でした。かつて老舎が[★の]学術討論会を開催した時に、代表団の一員で参加され、それ以後、よく北京にやって来られては、わたしたちのところへ見えていました。彼女はとても栄養学に凝っていて、中国の食料のことを研究していましたよ。ここに老舎の本が一冊ありますので、さしあげます。なかに写真があります。それにあの人の書いた新詩もあり、「剣北篇」も一部収録されています。／——わたしも詩を少し書きます。筆名は久紀夫です。三〇年前に臧克家氏の詩を翻訳し、それからです。今年、三月にはお会いする予定になっています。／胡潔青さん——かれはもう八〇歳を越えていて、体調はよくないようですね。あなたが翻訳しているのは、大体、新詩ですか、旧詩ですか。／——新詩です。時には旧詩の翻訳もしますが……。／胡潔青さん——この本のなか

のは、みな新詩です。老舎は一九六五年、日本に行った時には、少なからず旧詩を作っています。ほぼ二〇篇余りでしょうか。」(p. 12-13)
*「老舎の故居に別れを告げると、わたしは王府井からバスに乗り、沙灘から景山東街、北海の北縁を通過、西直門へ向かう。新街口南大街の入り口である平安里で降りて歩く。目的とする護国寺までは一直線。まもなくそれらしきものが見えて来た。右の通りは護国寺街だから、たしか老舎の生家は寺の西側、小羊圈胡同五号という路地だ。通りがかりの人、数人に問い質して、やっとのことで、街路の右側の小さな路地を指差された。現在では路地の名は変更されていて、小楊家胡同という。北京にこのたび来るに当たって、調べた文章には、もう生家は無くなっているとあったが、ちゃんと存在しているのを、わたしは自分の眼で確かめるのだと意識するとなんとなく胸騒ぎがする。」

(p. 13-14)

*「小楊家胡同八号はと確かめる。間違いはない。ノックをしようとする、彼女は「なかで写真を撮ってはなりません」と厳しく念を押す。／中から人がやって来て開けてくれたが、じろじろとわたしを見て疑いのまなざしだ。入って尋ねる。「ここは老舎の生家ですか」と。「そうです」。ぐるりと周りを見回す。東西、縦二〇メートル、南北、幅二メートルほどの窮屈な中庭に、三軒つづきの庇の低い粗末な長屋があって、一番奥が老舎(本名舒慶春)の生まれた家である。一八九九年二月三日、かれはこの北房三間の東向きの部屋で生まれたのである。殆ど原状のままだという。」(p. 14-15)

*「ところで老舎は、この長屋で、宮中護衛兵の父舒永壽を、一九〇〇年陰曆七月、義和団事件発生とともに、八カ国連合軍の北京城一斉攻撃で亡くし、一家は母親馬氏の、人様の洗濯や着物の繕いで、ほんとに赤貧の暮らしをしてい

て、かれ自身、九歳まで小学校にも通うことができなかったのである。わたしが訪れたので、長屋から這い出るように、姿を現したひとびとの衣服から察しても、まったく豊かという文字にはほど遠い。ノックする際の「写真をとるな」という言葉の意味を、わたしはしみじみと噛みしめるのだった。」(p. 15)

*「わたしは、またもバスの行き交う大通りの新街口南大街の道路をわたり、西直門内大街を辿る。左にながいが塀がつづくが、ここに以前、第四学区私立第二小学堂(京師公立第二両等小学堂)があったはずだ。老舎が第三学年に転入した小学校である。しかし、いまはそんな建物はまったく存在しない。さらに歩を運び、左に直角に曲がる。通りは南草廠街となる。右側に緑の葉をつけた樹木が二本、中央に突っ立っている運動場らしい広場があり、その縁に旧い校舎か、一棟並んでいる。しかしいまはどう見ても廃校である。やはり聞くと、南草廠京師十三小学堂跡だった。転入した前の小学堂が、女子校に変わったので、老舎はまたも、一九一二年三月にこの小学堂に転校し、年末に卒業したわけである。どうも跡地に何か建つ模様なので、現場の人に聞いてみた。北京テレビ大学を建設中とのことだった。」(p. 16)

*「南草廠街を南へ突き当たり、左、新街口南大街へ通じる道路を真っ直ぐ行くと、左の祖家街の塀に赤い校門が口を開け、軒に「北京三中」という横額が斜めに掛けてあるのに気づいた。一九一三年の初め、老舎が入学した中学である。現在でも北京有数の有名中学である。老舎と同時に南草廠第十三小学堂から合格したのは、僅か二名だけだった。それはかれと私立第二小学堂からの親友で、後に中国でも言語学者として名を馳せた羅常培である。／校内に進み、事務室で見学の意を告げる。[☆中略] さすが老舎の母校だとひとり頷くが、無言のうちに悲痛さ

が溢れ出る。なぜかと言えば、彼がこの北京三
中に籍を置いていた期間は、わずか六ヶ月だっ
たからである。授業料が続かず、退学に追い込
まれたのだった。そこで、やむなくかれは母親
に内緒で、その年の七月、近くの学費の要らな
い北京師範学校本科第一部に進学してしまっ
たのである。／わたしは、いま来た道を引き返
す。歩いてほんの三、四分の南草廠街の南端に、
当時の北京師範学校は所在していたから。旧所
在地の前に佇むと、校舎の周りには、レンガが
塀代わりに積み上げられ、二棟のレンガ造りの
二階建ての旧校舎だけが、そのまま残されてい
る。」(p. 16-17)

*「北京師範学校での五年間の学習を修業した
老舎は、抜群の成績を認められて、卒業と同時
に、一九一八年、十九歳の若さで、北京市立第
十七高等小学校並びに国民学校(現在の北京方
家胡同小学)へ、校長として赴任した。その場
所は北京城内の北東、地壇の南、安定門の近く
にある北京最大のラマ寺雍和宮の側で、国子監
街の南の通りである。／道幅は余り広くはない
が、歴史の跡をしのばせる落ち着いた町並みで
ある。わたしは北京滞在中、再三、王府井など
に赴いた折に、歩いて味わった場所でもある。
たぶん老舎は、ここ国子監、雍和宮という清王
朝を建国した満洲族にとって由緒ある一角で、
教鞭をとりながら、かれ自身の次の飛躍を夢見
たいたことだろう。やがて飛ぶ英国への留学を
も視野に入れて……。」(p. 17-18)

*「わたしが、二輛連結の無軌道電車に、ぐっ
たりと疲れた五体をゆだね、宿舎の北京大学に
帰宅したのは、午後五時三〇分だった。一日中、
歩きくたびれて足の裏にまめが二個できてい
た。これは生まれて初めての出来事である。夜、
テレビを見る。このところ、毎晩、連続の老舎
の小説「四世同堂」である。／「四世同堂」は、
十五年戦争中の一九四四年一月、重慶の北碚で
老舎が書き始めた小説だが、このなかに描かれ

ている胡同は、かれが生まれ、育った北京の護
国寺の傍らの貧乏長屋の、縦にながく横のない
路地、小楊家胡同八号(原小羊圈胡同五号)を
抜きにしては、考えられない。そしてまた『四
世同堂』は、わたしが老舎の文学に触れた最初
の作品でもあり、その原書は、一九四九年の春、
九州大学に入学した時期に、東京の中国関係書
店に入荷した数冊の晨光出版公司刊本のなか
の一冊だった。(2002・7・12)」(p. 18-19)
◇初出は、『天山牧歌』第56号(2002年7月)、
第57号(2002年10月)(『中国現代詩人訪問記』
「掲載誌」(p. 192)に拠る)

[蛇足]: タクシーなどには一切乗らず、地下鉄
と路線バスだけがたより。わずか一日でこれだ
け多くの老舎ゆかりの地を探訪された秋吉久
紀夫先生の健脚には、編者も秋吉先生と同年同
大学に遊学していただけに、ただただ脱帽の至
り。

【2011年上半期・補】

斎藤匡史「老舎小説の食譜――

長編小説『離婚』編(下)」

『東亜経済研究』(山口大学東亜経
済学会)第69巻第2号、1月31日、
p. 331-341

◆『離婚』食譜136(187-322)条

渡辺 武秀「老舎『帰去来兮』試論」

『八戸工業大学紀要』第30巻、
3月31日、p. 35-51

【2011年下半期・10月まで】

上野恵司「養花 老舎」

『音読で学ぶ 中国語名文塾』(アス
ク出版、8月20日)応用編第22回、
p. 95-98

◆解説/本文/語句の説明/音読で文法チェ
ック/練習問題

*「解説」：「作家老舎（1899－1966）は、北京生まれの作家。小説『駱駝の祥子』『四世同堂』、戯曲『茶館』などで知られる。北京語を自在に操ったこれらの作品は、普通語だけの知識ではちょっと読みにくいところがある。／ここではそういう方言色の少ない散文の中から一節を選んだ。全文800字余りの小品『養花』の書き出しの部分である。」

『老舎研究会会報』第25号（9月3日）

◆舒乙「献詞——祝賀日本老舎研究会会報出版25期——」p. 1／渡辺武秀「老藤井栄三郎先生を記念する」p. 2／藤井宏「父の思い出」p. 2－3／杉本達夫「老舎の雲南旅行のこと」p. 3－5／石井康一「2011老舎の北京」p. 6－7／吉田世志子「老舎に魅せられ取り組んだ七年間」p. 7－11／倉橋幸彦編「老舎関係文献略目(15)」p. 11－20：【2008年・補】【2009年上半年・補】【2009年下半年期】【2010年】【2011年上半年期】／倉橋幸彦「老舎著作版本考証『老張的哲学』（1）」p. 20－22／『『老舎研究会会報』総目次（第20号～24号）』p. 22－24／「事務局便り」p. 24

栗山千香子「中国語を学びはじめたころ」

『トンシュエ』（同学社）第42号、
9月20日、p. 14－15

*「三十数年前、地方の公立女子高校を卒業してO女子大学外国文学科中国語・中国文学専攻に入学した。トンシュエは定員通りの九名。中国語を担当なさるN先生はひつつめ髪とチーパオがよく似合う女性だった。N先生は最初の授業で、「あなたたちは、これから暗黒期に入ります。でも暗黒期を過ぎれば光明が訪れます。これからは私は授業で中国語しか話さないのです、しばらくは何もわからないでしょうが、ある時期を過ぎると突然ぱっとわかるように

なりますからね」とおっしゃり、そのあとは中国語になった（中国語は知らなかったが、それが中国語なのだろうと思った）。／……／夏休み明けのテスト【☆長谷川寛「中国語作文」】の出来がどうだったかは、答案の返却がなかったからわからない（学年末の評価は全員Aだったので、答案を見ていないのではないかというわさもあった）。テストが終わると、N先生から「月牙児」と書かれた教材を渡された。先生は「後期は老舎の小説を読みます。老舎を読めば中国の現代文学はみんなわかるのよ」とおっしゃった。今のテキストと違ってピンインなど付いていないし、語釈も文法説明もなかった。授業の前日はひたすら辞書を引いた。三日月の下で他人の臭い靴下を洗う場面があんまりみじめで、夜中に辞書を引きながらそんな文章を読む我が身も悲しく思えた。／そうして一年が過ぎ、中国語の発音も文法も中国の現代文学も突然ぱっとわかるようにはならなかったが、辞書を引くことだけは覚え、勉強は教えてもらうものではないことを知り、九人のトンシュエの間には連帯感と友情が生まれた。先日、やはり中国語の教員をしている友人にこんな話をしたところ、「私もそんな授業を受けたかった」と言う。そんなふうに羨ましがられても、当時ありがたみを感じる余裕がないまま授業を受けた者としてはいささか戸惑いを覚えるのだが、ただ、近年のように何かにつけ数値化して評価・管理する（される）ことの多い教育現場に身を置いていると、こんな授業が懐かしく思い出されるのも確かである。」

（再録）

上野恵司「北京語は老舎で学ぶ」

『ことばの散歩道Ⅲ 日中故事ことわざ雑記』（白帝社、10月11日）

Ⅱ 中文小巻、第60話、p. 174

*「今はすっかり様変わりしてしまいました

が、わたくしが中国語を学び始めたころの教室は、大学にしても講習会にしても、講読が中心でした。テキストに最もよく選ばれたのは、老舎の戯曲や小説であったでしょうか。わたくし自身が習ったものだけでも、『茶馆』『龍須溝』『全家福』などの戯曲を牛島徳次先生に、同じく戯曲で児童向けの『宝船』を講習会で倉石先生に、というぐあいでした。『駱駝祥子』は舞台用の脚本を牛島先生の演習で、小説のほうは自分で辞書と首っ引きで読みました。辞書は出たばかりの、倉石先生の『岩波中国語辞典』でした。引くと必ず的確な答えが得られる不思議な辞典でしたが、それもそのはず、用例のほとんどが老舎の作品から選ばれていたのです。普通話の学習をまずその核である北京語から、北京語はその最も勝れた作品である老舎文学からというのが、倉石先生をはじめ、当時の先生方のお考えであったかと思います。／まもなく訪れる文化大革命の激浪に老舎は人と作品をもろともに洗われることになりませんが、普通話に占める北京語の位置もまた、大きく揺れ動くことになりました。(04.11) [☆全文]

◇同書「はしがき」：「第二部の「中文小巷」は(株)アルク発行の月刊誌『中国語ジャーナル』に2004年4月から連載中の「中国語名文塾」のために解説を兼ねて書いたエッセイの最初の2年24回分である。」

◇なお、同書『ことばの散歩道Ⅲ』で他にも老舎に言及した箇所を引いておく。
*「“张三李四”と同じくらい、或いはそれ以上によく使われる語に“不三不四(bù sān bù sì)”がある。三でもなし四でもなし。正体不明である、怪しげである、まともでない、ろくでもない、といったところか。古いところでは『水滸伝』の中で、例のあばれ者の花和尚(いれずみ坊主)・魯智深が使っているし、近代では魯迅も使っている。老舎も『宝船』という児童向けの劇作品の中で、この“不三不四”をも

じって、悪者の一人に“”というニックネームを与えている。」(Ⅰ 日中故事ことわざ雑記、第13話「〇三〇四」は量産型の成語構造、p.46)
*「“一个萝卜一个坑(yīge luóbo yīge kēng)””。一本の大根は一つの穴を占める。それぞれに持ち場が決まっている。それぞれがそれぞれの職責を負っている。また、仕事ぶりがきちょうめんであやふやなところがないこと。ばか正直なところがある意にも。／今日ではどちらかといえば前者の意味で使われることが多いが(『現代汉语词典』はこの意味しか載せていない)、老舎は代表作『駱駝祥子』の中で愚直な田舎出の車夫・祥子を描写するのに、後者の意味で“一个萝卜一个坑”を使っている。」(Ⅰ 日中故事ことわざ雑記、第15話「一……」魯迅も毛沢東も使っている、p.52)

*「文化大革命については、今日の評価は否定的であるが、あの時期の国を挙げての毛沢東著作学習がその後の中国人の言語生活に与えた影響は見逃すことができないのではないだろうか。／わたくし自身の学習経験を顧みても、入門時に指導を受けた倉石武四郎博士や牛島徳次先生の影響もあり、『岩波中国語辞典』を頼りに読んでいた老舎の戯曲や小説の中国語とは異なる、またもう一つの中国語があることを知るに至ったのが、この時期である。」(Ⅰ 日中故事ことわざ雑記、第16話 ちゃらんぼらん和尚の鐘つき、p.56)

*「魯迅、郭沫若、茅盾はいずれも癖があり、難解です。老舎がいいという人が多いのですが、こなれた北京語というのは、なかなか手に負えないところがあります。その点、巴金は読みやすいというのが、わたくしの見立てです。」(Ⅱ 中文小巷、第59話 まず巴金から、p.173)

「老舎『微神』 相原茂編 朝日出版社」

『日中学院報』439、10月1日、図書室だよ

り、p11

*「老舎と言えば『茶館』を思い浮かべる人も多いと思うが、今回は短篇を選んで見た。本書には表題作と『想北平』と題する随筆が収められている。北平は現在の北京。原文は1939年に書かれたものだが、名作は時代を超えて読む者の心を打つ。導入部は編注者が「簡略」を試みたとある。悲恋物語と旧き北京を秋の深まりと共に味わってみてはどうでしょう。」

【会務報告・HPの開設】

昨年2011年度大会の打ち上げの席上で、老舎研究会も時代の流れに乗ってHPを開設し、積極的に情報を発信していかなければならないという声が会員各位から上がっていました。毎回発表を聞かせていただくだけの私でもお役に立つことができると思い、さっそく倉橋会長の許可を得てHPを開設しました。

まずは老舎研究会のこれまでの歩み分かる会報を電子ファイル化しなければということで、倉橋会長から過去の会報をお借りして順次アップしていきました。今後老舎を研究する若い世代のための資料の一つとして、セピア色になりつつあった30年近く前の会報に再び命を与えることができました。

HPという箱はできたものの、今後どのようなコンテンツを載せていくかは会員各位からのご意見を頂戴たく思います。ともかく、会報以外にもう一つ老舎に関する情報発信ツールが産声をあげたことをここにお知らせいたします。

HPへは「laoshe.jp」でアクセスしてください。尚、会報第13号、第22号が欠番となっております。お手持ちの方がいらっしゃいましたら、ご提供のほう宜しくお願いいたします。

(紅粉 芳恵)

老舎事務局便り

◇2011年度大会は9月3日〔土〕に、大阪産業大学梅田サテライト教室(大阪駅前第三ビル19階)で開催されました。

◇当日の発表者とテーマは次の通りです。

瀬戸 宏「老舎『茶館』と満族意識」

倉橋幸彦「老舎研究会会報」25号発刊を記念して雑憶(委員会を兼ね)」

この日、大阪はあいにく台風の襲来で大雨。このため「講演」として舒乙氏の「老舎の人文精神」も用意されていましたが、不運なことに中国から飛行機が到着せず、急遽、倉橋氏により「老舎のノーベル賞受賞候補の噂の出所」についての報告がなされた。

◇舒乙氏は、当日の夜遅く日本に無事到着された。倉橋氏が舒乙氏を迎えに行くため、懇親会半ばで退席されたのを覚えております。なお、舒乙氏の講演の方は後に東京で行われ、東京の会員の方はお聞きになったかもしれません。さすがに、八戸の会員は残念ながらとうとうお会いすることも講演を拝聴することもできませんでした。

◇毎回、この「事務局便り」には、エッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿を募集しております。何卒奮ってご投稿いただきますようお願い致します。話題も何も老舎に限らず、もう少し広い意味で北京の歴史や風土文化に関する投稿も大歓迎です。

また、バックナンバーご希望の方もご一方下さい。(編集員)

老舎研究会会報第26号 (2012年9月1日)

〒031-0814 青森県八戸市妙字大開 88-1
八戸工業大学 基礎教育研究センター
(渡辺)研究室 老舎研究会事務局
TEL: 0178-25-3111 (代表)